

「全鍍連」 2021年 12月号 いきいき地域

全鍍連情報・国際委員 古林 克匡 (株)日広鍍金工業所 代表取締役社長)

「渋沢栄一と静岡」



静岡県鍍金工業組合の古林と申します。今回は大変貴重な機会を頂きまして有難うございます。実はこれで3回目の掲載となります。最初は「駿府城」2回目は「今川義元」と続き今回は大河ドラマ「青天を衝け」でおなじみの「渋沢栄一」を題材に静岡との繋がり、そしてここでの活動がのちの日本発展と更に繋がる事をお伝えしたいと思います。静岡で渋沢栄一が過ごしたのはわずか10か月程でしたが、渋沢栄一が静岡に来ることになった背景からみてみましょう。フランスパリに滞在していた栄一達のもとに「大政奉還」「鳥羽伏見の戦い」そして慶喜達が水戸へ向かったとの知らせが届き、その後帰国命令が下ることになる。徳川慶喜の話に及びますが、鳥羽伏見の敗戦で慶喜が大阪城から江戸へ戻り江戸城を出て徳川家の菩提寺である寛永寺に入り謹慎、恭順の意を示した。その一方では東征大総督が駿府（静岡）に到着し、その翌日には江戸城総攻撃が決まる。しかし勝海舟が派遣した山岡鉄太郎（鉄舟）が総督府参謀西郷と駿府伝馬町で会談を持ち、慶喜の助命に関する交渉がはじまり好条件にて終える。その後、薩摩藩高輪屋敷に入った西郷は、勝海舟との会談に臨み、江戸城総攻撃は延期となり、慶喜の助命も決定する。江戸城は東征軍に明け渡され、慶喜は謹慎中の寛永寺を出て水戸に向かい、水戸で謹慎生活を始める。新政府は駿府（後の静岡藩）を徳川宗家の領地と定めると水戸にいた慶喜及びかつての幕臣の多くが移住した。そして徳川家康の守り本尊がある宝台院で慶喜は謹慎した。そこにパリから帰国した渋沢栄一が昭武から託された慶喜宛ての書状を手渡すため静岡へ。以上の事が背景となり、渋沢栄一が静岡藩士として誕生するきっかけとなります。静岡藩士「勘定組頭」の役職について渋沢栄一は早速動きまわります。「静岡藩の拝借金50万両をうかつに藩の経費に使用した場合、返済をどのように考えているのか。静岡藩は新たに置かれた藩であり、これまでの蓄積がない。その上静岡の風土は狭く歳入も見込めない。政治的には一度破綻した静岡藩（徳川家）は、今度は経済的に破産することになる。これを予防するためには、石高拝借金をすべて藩の一般会計から切り離した特別会計とする。これをもとに殖産興業に努め、その利益を返済に充てれば、藩の利益になるだけでなく、民衆のためにもなる。一人の力ではとてもできないから、西洋にある合本法の採用を急ぐ必要がある。石高拝借金を基礎として、地元の資本を合わせて商社をつくれれば、静岡は発展するだろう。それだけではなく、静岡で合本法による商売が成功すれば、それが全国に自然と伝播し、日本の商業維新となるだろう。」と栄一は熱弁した。そして渋沢栄一は駿府町人達のみならず藩と共に株式会社の先駆け「商法会所」設立し、快進撃を見せていきます。しかし、さらなる事業の拡大を考えていた矢先、静岡での生活は突然終わりを告げる事になります。明治新政府からの

出張命令、大隈重信との面談により新政府で日本の為に働くことを決意するのであります。わずか10か月程の短い間に静岡の地で「商法会所」設立し、この先の日本の礎を築いた事、更には渋沢栄一と共に仕事をして得た経験は静岡の人々の確かな糧となり、静岡の発展に繋がったと言えると思います。また渋沢栄一と静岡との縁を結ぶきっかけとなった徳川慶喜に触れさせて頂きます。1年2か月に及んだ宝台院での謹慎が説かれた後は宝台院を出て、紺屋町の元代官屋敷に入り、水戸藩邸などに居住していた正室美賀子も静岡に来て一緒に住むことになりました。徳川慶喜は30年余りを静岡で過ごし、長い謹慎生活の鬱憤を晴らすかのように趣味に没頭しました。銃獵・鷹狩・投網・鶉飼い・謡・能・小鼓・洋画・刺繍・将棋等があり、壮年期の慶喜はなかでも特に銃獵・鷹狩・投網を好み、当時の静岡では珍しかった人力舎に乗って連日、日が落ちるまで外出していたといえます。静岡を離れた渋沢栄一でしたが徳川慶喜との関係は続き、数年に一度は慶喜を訪ねていたといわれています。徳川慶喜、渋沢栄一のお二人の影響は多大であり、静岡のみならず日本へ波及していきました。今回の「渋沢栄一と静岡」について改めて歴史を掘り返し、静岡に誇りを持つ事と同時に世の為人の為に尽くすことを実行しようと決意しました。最後となりますが、静岡に興味を持ちお越しいただくのであれば、是非、徳川慶喜公屋敷跡である浮月楼で素晴らしい庭園を眺めながらお食事をしていただければと思います。そして宝台院、徳川家康の眠る久能山東照宮にも脚をお運びください。